在て、晝夜坐臥を同ふして遊ぶ事三年、城外四邊の名跡所々見めぐり、近き程南京西湖等にあそばしめんといひて、さま〳〵日ごとの馳走美を盡せりといへども、唯日本をなつかしとおもふ心しきりなりければ、強て暇を乞しに、さま〳〵留められしかど、老親に事よせて終に長崎へかへりぬ、此おのこ日本風俗にあらため、清川氏久右衞門と號し、元祿年中まで存命居て、福建道所所の物語、國姓爺城中のありさま、男女の風俗、四季折節の儀式、城内正朔元三に門戸に松竹を飾り立る事、日本のごとく祝きしたぐひ、鄭成功日本故郷を慕ふの意深かりしと見えたり、是より今に福閩の間、正月門松立る所多しと聞傳ふ、偖鄭成功が別腹の弟も長崎にありしを、福州よりむかへもせずして、長崎に居住せしが、後に國姓爺日本へ便船ありて、援兵を乞し時、おのれ行ん事を願ふといへども、公けの許しなくて、つゐに不行、援兵も又ゆるしなくしてむなしく便船は歸され、本朝へ珍貨の音物共も、受給はずしてかへされぬ、此時國姓爺は福建道を平均し、南京浙江までしたがへ、北京の帝都に責上り、北京城を責て、既に勝利を得べかりしが、韃旦の勢は日々に數そひ、味方には援兵なくして、終に敗軍し、福州へ引かへしぬ、吳三桂も雲南貴州の遠境に在て、援兵を出す事あたはず、日本の援兵も叶はねば、都て福州城をも韃旦に責破られ、鄭成功は泉州城へ落行ぬ、此時日本平戸よりむかへし鄭成功の母は、我日本を去て爰に來れるも、子孫の榮華を見んとおもひてなり、今老て此難にあふ事、何の面目在て又爰を去ていづくに往事をせんやといひて、城の樓に登りて自害しつゝ、下なる大河に落入てこそ死にけれ、日本女人のありさまかくの如くなれば、男子の武勇、おしはかりぬと、韃旦の軍勢みな舌をまきけるとかや、國姓爺はしばらく漳州泉州に在しが、かねて覺悟したりければ、厦門といふ島に一城を築て居住す、此島漳州泉州の地を去事甚近く、要害無雙の城地にて、万國への運湊便りよき所なれば、漳州泉州等まで、韃旦責破りしかども、此厦門を責る事不叶、一島みな國姓爺の領とぞ成にける、厦門は凡